

復興の教訓

過去からのメッセージ

5

東日本大震災で被災地を襲ったのは津波、東京電力福島第一原子力発電所の事故、それに伴う風評被害だった。さらに今後、襲い来る波は「風化」だ。震災の怖さを忘れず後世への教訓とするため、阪神・淡路大震災が起きた兵庫県が仕掛けたのは、毎年10月17日を「おむすびの日」として記念日とすることだ。食の大切さ、人々の善意を絶対に忘れてはいけない。おむすびの日を通して、都市と農村の絆の尊さを伝えていく。

近隣の農家が

おむすび提供

6434人も死者として70万人に及ぶ被災者を出した1995年1月17日の阪神・淡路大震災。大きな被害を受

風化させない 兵庫県

けた30万人以上の避難者が、飢えや乾きで一人も死ななかった。奇跡を生み出したのは、周辺に農村があったからだ。農家の女性たちが自家用の米を出し合ってJAの調理場でおむすびを握り続けた。それが多くの命を救った。

食の尊さを記念日に

震災が起きてから、避難者について、おむすびが届けられたのか。神戸大学の保田茂名善教授によると「17日当日から届けられた地域もあった」と迅速な対応が取れた点を強調する。背景には、都市周辺の農村が被災を免れたことに加え、①前年の米が豊作だっ



「手をやけどしないように茶わんを使って、まずはおむすびを丸くするのが震災の知恵」と西馬さん（神戸市西区で）

たの村に善意があった②食文化があったこと——を挙げている。「この条件の一つでも欠いていたらおむすびは届いていなかった」と振り返る。当時、仲間とおむすびを握り続けた一人が、神戸市西区神出町で有機農業を営む西馬きむ子さん（66）だ。米の1

俵や2俵くらい、ええがな。お互いさまや」と自分たちが食べる分の米や野菜まで供出した。日頃から提携している消費者グループにおむすびやおでん、水を届けようと震災翌日から被災地に向かった。「食は心も体も育む。足元の農村が健全であることがいか

に大切か、気付いてほしい」と西馬さん。有機栽培に取り組む女性グループ「ヘルシーママSUN」の活動を通して、今も子どもたちに食の大切さを伝えている。一方、農山漁村を直撃した東日本大震災はどうだったのか。宮城県石巻市で支援に当

都市を救った

農村との連携

保田名善教授は言う。「農村を粗末にしていたら絶対に食料は手に入らない。もし、首都圏でこれだけの災害が起きたら一体、どこからおむすびが届くのか。おむすびの日」は、日頃から都市と農村の連携こそ、災害時に強い連帯を生むことを伝えている。（おわり）

たる、特定非営利活動法人（NPO法人）フェアトレード東北代表の布施龍一さん（36）は「震災当初は飲まず食わずの状態が続き、市街地では8日目くらいからおむすびが届いた。郡部では2週間目にして、やっと届いた」と明かす。当時自分たちで食料を工面するしかなく、「農業や漁業が壊滅的な打撃を受ける」と、ここまで食の問題に直結するの」と痛感したという。（原尻大志、尾原浩子、鈴木祐子が担当しました）